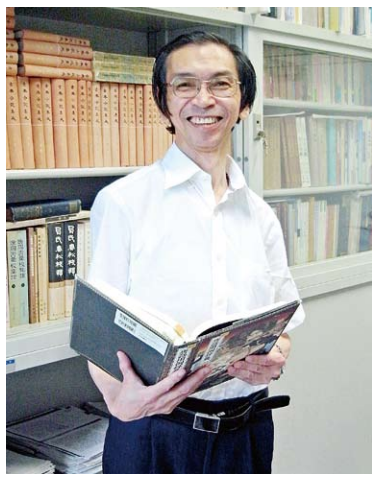
日本における中国の通俗文学の受容

国際関係・小田切 文洋教授


研究室で

日本人が本格的に〝生きた中国語〟を受け入れ始めたのは1700年代、すなわち江戸時代の中期近くのころからという。江戸時代は鎖国政策がとられたことで有名だが、「実際にはオランダをはじめ、中国（当時は清）や朝鮮など諸外国と交流があり、日本人が中国文化に最も憧れた時期。この江戸期から明治・大正時代にかけ、文学の面から中国と日本の交流を研究しています」と小田切教授は話す。

文学研究の特殊領域

同教授が「日中の比較文学でも特殊な領域」というこの研究は、口語体の中国語（白話）で書かれた明・清の時代の文学作品が日本人にどのように受け入れられて来たのかを語彙（ごい）の「翻訳」を手掛かりに解き明かそうというものだ。

白話受け入れの主な接点となったのは通俗小説だった。そこで、「水滸伝」「西遊記」「三国志演義」「金瓶梅」の四大奇書や、狐の精や妖術使いが活躍する「平妖伝」など訓読式に翻訳された通俗物などから訳語を収集。さらに、それらがどのように日本語の語彙の体系の中に受け入れられていったのかを探るため、曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」や上田秋成「雨月物語」などの読本（よみほん）をはじめ、明治・大正期の文学者の著作やさまざまなジャンルの翻訳・翻案作品にあたり用例を調査。中国語から日本語への移し替えを分析して両言語の関係性を調べている。

訳語の用例を集め考察

江戸～大正期の翻訳を調査

こうした研究から、当初「漢文訓読」の応用だった翻訳が明治の終わりから大正にかけて徐々に口語体に変化していったことが分かった。中国人の生活や民族性を観察・研究する「支那通」と言われる人たちの出現、また中国の伝統演劇の研究の高まり、それらを背景にして中国および中国文学への理解が格段に深まったことなど、その背景には幾つかの要素があると考察する小田切教授は「日中間にこうした文化的な遺産があるのを知ることも大事なことではないか」と指摘する。

先駆性を国が評価

これらのテーマは早い段階で共同研究者とともに文部科学省の科学研究費助成事業（2001年度）に選定され、独創的・先駆的な学術研究と評価される一方、成果の一部は「江戸明治唐話用例辞典」（2008年、笠間書院刊）という大著になって社会に送り出されている。

これが基点になって、研究はほかへも広がりを見せている。日本文学の研究が中国でどうなされて来たかの調査・研究もその一つ。中国において日本文学が研究の対象となるのは日清戦争（1894～95年）以後のことで、1929年刊行の、日本文学研究の最初の通史的著作といわれる「日本文学史」「日本文学」（と

今年８月、広東外語外貿大学で開かれた日本文学研究会第十四期例会と国際学術シンポジウムに出席のため、中国広東省広州市を訪れた

もに謝六逸著）に焦点を当て、日本の文学をどのような視点から評価しているかなどを掘り下げている。

こうした研究のきっかけは、中国における日本研究の拠点であり日本政府も運営協力する大学院大学「北京日本学研究センター」を訪問したことだった。元々は「源氏物語」をはじめ日本の古典文学研究から出発した小田切教授だったが、そこで出合った中国語vs日本語対訳のコーパス（大量の言語を集めたデータベース）から着想を得たのだそう。

同教授は「同じ文系でも経済学とか法学のように生活に直結する学問ではないが、日中のこうした文化や文学の交流を改めて検証していく必要がある。そのために調査・研究をより一層深めていきたい」と話した。

研究成果の一部「江戸明治唐話用例辞典」の表紙

プロフィル

小田切　文洋（おたぎり・ふみひろ）昭和48年国学院大学文学部を卒業。同大学大学院文学研究科修士課程修了後、本学大学院文学研究科国文学専攻へ。53年博士課程単位取得退学。短期大学部助手、平成11年国際関係学部教授、14年大学院総合社会情報研究科教授。18年大学院文学研究科兼担教授。日本比較文学会、和漢比較文学会などに所属。博士（国際関係）、文学修士。福岡県出身。63歳。

計測・診断技術の創出を目指して

工・長尾 光雄准教授

生体医工学・生体材料学・知能機械学を研究分野とする長尾准教授の計測・診断システム研究室が目指しているのは「人と自然に優しい計測・診断技術の創出」である。一つ目が自然環境と暮らしに関した、衣食住の安全・安心、快適で静粛な音空間の実現。二つ目が健康長寿に関した、アートとサイエンスの融合医療、心身が健康で持続的な社会の実現に向けた研究が行われている。

これらの研究の中で現在、進めているのが「変形性関節症診断のための計測システムのセンサの開発」という。その目的は変形性膝関節症（膝OA）の予防医療のための診療支援計測システムの提案である。要支援や要介護になる歩行機能の低下に関わる、膝関節のOA診断に焦点を当てることという。

厚生労働省の資料によると「要支援1」の主な原因は、関節疾患と骨折や転倒を合わせると全体の約35%を占めている。これにより運動機能に何らかの障害が起こり始めた時点から「QOL＝生活の質」は低下していくことがわかる。

また、40歳以上の骨関節疾患の患者数の調査結果では、4700万人がOAまたは骨粗鬆症を罹患しているとの報告もある。膝OAは進行性疾患と言われ、現状では進行遅延のための治療や人工関節置換手術が有効な手段となっている。ただ、損傷部位の再生や完治は見込めない疾患でもあるため、発症初期の発見は有効な治療につながるものと考えられており、それを提案するための研究を行っているもの。

長尾准教授が開発に取り組んでいる、変形性関節症早期診療用計測支援システムのための試作中のセンサ

健診による早期診療

これまでの研究では、臨床で活用できる計測システムの提案まで及んでいないため、未解決なことが多かった。そこで、長尾准教授は「未解決な課題に挑戦するために、関連機関の協力を得ながら、骨関節のメカニカルな発信を捉える骨関節音響センサ装置を備えた膝OAの診断用計測支援システムの開発を目指しているものです」と語る。

このシステムが実用化した場合、工学部のある福島県では高齢者が多いわりに病院を訪れる機会が少ないため、集団健診や巡回健診による早期診断の効果が期待できる。受診者を診断することで医師は自覚症状が出る前に発症の疑いや進行度合いを推定し、早期から診療することができ、結果的に予防につながる。

また、臨床検査の撮影では骨関節部の静止画像からの診断となるが、動いた時の情報が加わることで膝OA診断の精度は高くなる。さらに、治療の効果や経過観察など蓄積された情報は診断の根拠となり、診療の質向上にも貢献するという。

骨関節アンチエイジング支援計測システムを提案

～未解決な課題に挑戦～

「報・連・相の確」

長尾准教授は昨年、日本設計工学会の春季研究発表講演会で優秀発表賞を受賞した。その論文は「人工疑似しこりを用いた筋硬度計の硬軟探索に関する研究」で、肩こりなどのしこりの硬さを測定する装置の開発・研究について発表したもの。

このほか、整形外科で使用される脊椎開孔用ロータリーバーのセーフティストップ機能の開発など、各種の研究を行う一方、機械要素設計、計測工学、機械工学実験Ⅰの授業も担当。機械要素設計は、与えられた条件を満たしながら重要な部品（要素）をどのように設計するかを学生に考えさせる授業である。

実験データの解析やプレゼン資料作成の部屋でゼミ生と長尾准教授

ゼミ生は卒業研究の4年生15人。学生たちはパソコンが並んだ部屋で各自研究を進めているが、週に1～2回は打ち合わせも行われている。

研究室には学生にとって大切な「10か条」を書いた紙が張られている。中でも「これが、社会人の基本です」というのは「報・連・相の確」の実践。長尾准教授は「卒業研究や就職活動をする中で、報告・連絡・相談、これら要点の確認を行い、しっかりと身につけることで将来、我が身を守ってくれるということを、事あるごとに触れて、話すようにしています」と語る。

プロフィル

長尾　光雄（ながお・みつお）昭和55年日本大学工学部卒、同大学院工学研究科博士前期課程修了。同大学助手、専任講師を経て現職。平成18年から福島県立医科大学医学部整形外科学講座、同25年から延世大学校（韓国）保健科学大学医工学部バイオメカニクス研究室との連携研究中。日本設計工学会優秀発表賞・功労賞等を受賞。日本機械学会などに所属。博士（工学）福島県出身、57歳。